

津田昇平教話 第四〇九話

令和四年二月十三日 朝の教話

今日もありがとうございます（上）

今日もありがとうございます、今日もありがとう

とうございます（上）

おはようございます。令和四年二月十三日の朝をお迎えすることができました。

年頭のみ教えの中に、次のようなご理解がございます。

氏子^{うじこ}らは、情けない、つらいことだと先を案じずに、今日もありがとうございます、今日もありがとうございます、すと思い、神様のおかげで雨にも遭^あわず露^{つゆ}にも遭^あわず、ひもじい目も寒い目もせず、ありがたいことと喜べ。

一理Ⅱ 柏原^{かしわばら}とく七

をいきがみこんこうだいじんして生神金光大神として生きていかれたのか。一人の氏子として、人間として、天地の間に生かされる者として、どういふ心で生きて、どういふ信心をして、神様から見み初められたのかという、その中身だなあと
思うんですよね。

「氏子らは、情けない、つらいことだと先を案じずに、情けない、まあ自分のことが情けないといふこともあれば、一生懸命いっしょうけんめいやってもこれが現実かと思うと情けないようなつらいような、そういう気持ちになると、
いふのは、まあお互い皆あるはずなんです、でもそういうことでも、
これから先のことまで一体どうなるんやろうかといふふうにして、
い
考えるんですね。」

でも、先のことをあれやこれやと思うんではなく、情けないくらいいとだといふのも、大体、過去のことまきんに起因きんすることが多いでしょうから、そう思うと、過去のことを振り返って、「過ぎた悪いことを思い出して苦しめるな」やし、「先のことを言っつて、悪いことを言っつて待つな」だし、それよりも「今が大切」。今が大切と言っつても、今をどう生きるかというよ、「今日もありがとっつています、今日もありがとっつていますよっつと思っつと仰っつて、このみ教えで」「今日もありがとっつています、今日もありがとっつています」「っつて、一回も繰り返しておられるんですよね。

これはまあほんとに、赤沢文治さんがこのようにして、一人の人間として生き抜いたといふことだろうと思っつんですね。もちろん、み教えと

も寒い目もせず、ありがたいことと喜べ」。それを当たり前と思うなという事ですよね。これが有り難あいんだという事ですよ。

教祖様も、七つも墓きずを築かされたり、ご自身の身の上のこと、色々ご苦勞があったわけですね。神様のお役に、御用に立たして頂くということになっても、大変なことがいっぱいあったわけで。神様から「力落とさず」というふうにして励はげまされないといけないぐらいに落ち込むような出来事もあったわけですが、そういうことがあった中でも、「情けない、つらい」というふうなことを少し置いて、今の今、おかげを頂いてる、今の今おかげの中で生かされているんだという、そこをよく見なさいということですね。神様のおかげが、今何もないのんか、何もおか

げがない中で生きてきたんか。違うやろうが、どこ見とるんや、ということですね。「今、よう見なさい」と。「頂いてるおかげをよう見なさい。どこ見てるんや」と。人様のテーブルばかり見て、「あれがええな、これはいいな」言うて、もう人のテーブルばかり見てね、自分が今頂いてるおかげ、頂いてるものというものをどれだけ味わって「ありがとうございます、ありがとうございます」と言うて、喜んで頂いてるんか。神様は一人ひとりのことを思って、自分のことも思って、言わばスペシャルメニューのおかげを下さってるにも関わらず、人のテーブルばかり見て、「あれがない、僕には」「あの人こんなんがあっていいなあ」って。「僕のこれよりも、あっちの方が美味しそうやな。あっちの方が美味

そうやな、価値がありそうやな、「そうやって結局、「自分が頂いてるのは、あんまり美味しくないなあ。こんなんで、あんなんで…」って、文句ばっかり言う。そういう心がまあ情けないですわね。

人の、よそのテーブル見んでええから、本来やったら、見るんやったら、本来自分はどんなテーブルになってたはずなんか。もうテーブルどころか、片付けられてたかもしれないようなところを、こうしておかげを頂いて、命も繫つないで頂いて、たくさんのご愛情も授けて頂いて、その中で今の今、生かされて、日々ありがたく頂いていいはずのもの、頂いてるはずのものをありがたいというふうにして喜ばないというのは、な
んどういじやぶでしようかね。

羨むせうむようなものがないことを嘆くんじゃなくって、何を授けて頂いても文句しか言わない自分の心を嘆くべきでしよう。「今日もありがとうございます、今日もありがとうございますと思ひ、神様のおかげで雨にも遭わず露にも遭わず、ひもじい目も寒い目もせず、「この神様のおかげをありがたいこと、有ることが難しいと漢字で書いて「有の難い」、有の難いこととして、そのことをまます喜ばして頂へ。今日もありがとうござります、今日もありがとうござります。情けないらしいことだといつうふうにして嘆くんじゃない。

その情けない情けない言うて、言われる神様のお立場を考えたらね、授けて下さってる神様のおかげを全否定するのと変わらんでしよう。こ

んだけして頂いても、あんどだけして頂いても、色々無礼お粗末不行き届きがあつても許して頂いて、それでもこれだけのおかげを下さつてる、ご愛情の形として、目に見えるものも含めてたくさん授けて下さつてる。それなのに人様のところばっかり見て、自分にはあれがない、これがない、ないないないない言つて、で、文句ばかり言つて、それを聞かされる神様の御心みこころはいかに。神様の方こそ、「情けないなあ、辛いつらいなあ…」という気持ちにもなるんやないでしょうかなあ。

「今日もありがとうございます、今日もありがとうございます」と、何もすごい宝くじが当たったからありがとうございますという話やないんですよ。今の今おかげの中で生活をさして頂いてる、そこがありがた

いとらうじです。失ったら分かるというんじゃ遅いんですから、今の今、「雨にも遭わず露にも遭わず、ひもじい日も寒い日もせず」。もうこれが見えなくて保証されてる、その中で暮らすことができること、これだって、どれほど有り難い、勿体ないことかと思えますね。

喜び上手のお礼上手、まあそういう心であれば器ができますから、そこから先のおかげもたくさん頂くことができます。でも、今授けて頂いてるおかげに、ろくに感謝の心も、喜びも乏しければ、器が小さいです。それから、これから先のことだって残念なことになりそうですね。そんならんように、信心のお稽古けいこをしてるわけですから、しっかりとお話を聞かして頂いて、聞かして頂いたことを自分の心に照らして、自分の心を

また作っていくということが人間にはできるわけです。自分の心がありがたくなるのを待ってたら、誰だって不幸にしかありませんよ。ほっとってありがたいなくなるわけじゃないんです。ありがたいことをよく見て、それに気付いて、そして初めてお礼を申し上げていく心になっていくんですよ。心は耕さんかったらだめですよ。

どうぞ神様のおかげをお互いに頂いている今の今を大事にして、今の今頂いてるおかげをよおーく目を凝らして、しっかりとそこを噛み締めながら、味わいながら、今の今を喜んで、過ごさして頂きたいなと思いますね。

もしも今日一日おかげを頂いてください。ようお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第四〇九話

令和四年二月十三日 朝の教話

今日もありがとうございます（上）

令和四年四月一日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五

